

CICOPA（労働者生産協同組合委員会）世界会議

－2つの報告とオスロへの旅から－

玄幡 まみ（日本労協連国際担当）

本年9月ノルウェーのオスロでICA総会、CICOPA世界会議と総会が開かれ、こうした会議に参加することができた。本リポートは世界会議の2つの報告と1つの光景についてである。この旅は5日間ほとんど一日中会議ばかりで、市内の風景はただ単に眼に飛び込んでくるだけのようだった。だが、ただ1つ強烈な印象が残っており、それはまさに今日私たちにかけられた課題といえるものである。

さて、CICOPA世界会議は「労働者協同組合の世界的協同の基準確認とその発展状況」がテーマである。報告者はアジアから労協連の菅野理事長が、そして欧州、北米、南米、アフリカなど10カ国から、さまざまな労働者協同組合運動とその発展状況の報告があった。

ここでは特に欧州での2つの興味深い発言を取り上げる。これはフランス語でのスピーチでテ・プおこしを神田順子さん（フリーランス）にお願いし、私が加筆・訂正、中見出しをつけた。スピーチ原稿については「です・ます調」でまとめている。

最初に彼らの報告を要約しておく。いま、欧州連合では新しい欧州をめざし憲法草案が討議されている。いままで15ヶ国だったEU(欧州連合)加盟国に10カ国が加わり、EUは25カ国体制になる。世界会議でもCICOPA総会でも度々聞いたのは、欧州がいま過渡期にある、ということばである。

ヨーロッパでいま協同組合は非常に注目されている、というのが欧州委員会フランス・イアニエツコの発言である。彼は、一般企業と協同組合が共存できる新たな方策をさぐるのが自分の立場であり、協同組合一辺倒でないことを率直に認めつつ協同組合への期待を語っていた。特に、すべての機関と組織の間での絶えざる対話の大切さや（ILOでもディーセントワークを進める4つの戦略として雇用、権利、社会保障、ついで社会対話を強調）協同組合をもっと外部にアピールすることの必要性。そのために協同組合関連法規を欧州委員会で策定し、統一した基準で優秀な協同組合を認める制度整備を検討している、と言う。こうした欧州委員会からの率直な提案に耳を傾ける必要がありそうだ。

第2番目の発言は、フランス生産者協同組合総連合会ジャン・ゴートイエ（専務理事）の報告である。彼はフランスの歴史を遡って協同組合の現在の役割を明らかにする。彼のスピーチを聞いていて、今年2月国連安保理事会で「戦争と占領と蛮行を経験した古い国から」と発言したドビルパン仏外相の演説を思い出した。この国は、どの政派もまず歴史認識から出発するようだ。ゆっくりと歴史を紐解くような口調だったが、しだいにスピーチの終わり近くになると、ゴートイエ氏は高揚し巻くしたてるような早口となる。

彼は19世紀からの協同組合の歴史を振り返り、現在協同組合は競争を強いられており、本来の理想を守りつつ、再編する必要性に迫られている、と説く。そのために、協同組合内部では共通のモデルとルールを模索しつつ、公共との連帯を深め、“資本の論理”と“労働の論理”を統一したコーポレートガバ

ナンスを継承し、持続可能な成長を図るべきだ、という。彼のこうした提言は日本の労協運動にとっても意味をもつにちがいない。

最後に世界会議とは直接関係がないが、オスロで深く心に留まった光景についてふれておく。それは真っ昼間からオスロ駅前の公園でたむろし、麻薬の注射をさしている青年たちの姿だ。2人や3人ではない。7人が8人、いやそれ以上だったかもしれない。アメリカやカナダでも、白昼堂々と青年が麻薬の注射をしている状況に私は出くわしたことがない。面食らって眼をそらそうとしたが、彼らは一向に気にする風でもない。明るい光とは

裏腹に、青年を取り巻く状況の厳しさが突き刺さってくるような瞬間だった。

ICA 総会でバルベリーニ ICA 会長も ILO ソマビア事務局長も失業、貧困、その中での仕事おこしへの協同組合の役割を強調していた。その演説の内容がごく自然にうなずける情景である。今年欧州は熱夏で1万人もの高齢者が亡くなったという。そして、フランスでの年金改革反対のストライキ。若者も高齢者も決して安堵してられない時代である。社会改革の担い手としての協同組合を、というゴートイエ氏の結論が胸にしみた北欧の旅だった。

CICOPA 世界会議報告

フランシス・イアニエッロ(欧州委員会)
訳 神田順子・玄幡真美



はじめにー欧州委員会の立場からー

本日はお招き下さり、まことに有り難うございます。私にとって、皆さんのように見識ある方々と意見を交換することは大きな意味があります。

話を進めるに当たり、強調したい点が二つあります。まず、これまでスピーチされた方たちは確信に満ちあふれていたのに対して、私は多くの疑問を抱えています。ですから疑問を晴らすためにも皆さんと論議を重

ねたいのです。

第二に強調したいのは、私の立場です。私は無論協同組合の国際会議に出席した経験があり、皆さんの(協同組合運動への情熱)は存じています。しかし私は公務員であり、その立場上同じような情熱を抱くわけには行きません。公僕として皆さんのお役に立ち、皆さんが抱える問題を解決する道を共に探っていくのが私の務めであり、現在とそして将来の欧州連合加盟国の人々のために働いています。また、私は皆さんのように“第三の道”といった表現は使いません。そうではなく、“資本をベースにした一般企業と協同組合が共存できる新たな道”を探っているのです。私の話をお聞きになって“革命的でない”と思われるかも知れません。がこれは立場の違いですからご理解下さい。